

## 特集 地域特産作物

## Ⅱ い【産地の取組】

## 江戸の初期より庶民の敷物、畳として愛された七島イ再生の取り組み

くにさき七島蘭振興会 事務局長 細田 利彦

## 1. 七島蘭（学術名シチトウイ）とは

七島蘭は敷物や畳表の原料で、カヤツリクサ科の多年生の草木で一般的な畳表のイ草とは別種である。亜熱帯性の植物であり茎は三角形をしていて生育旺盛で一日に20センチも伸長する。トカラ列島の七つの島が原産地といわれたため七島蘭と呼ばれるようになった。低温には弱く地下茎で冬を越すため霜などで被害を受けると出芽不良や苗不足が招くと言われ、比較的温暖で降水量の少ない国東半島は適地と言われている。

## 2. 七島蘭の由来

(1) 江戸時代以前は、イ草の畳は貴族、僧侶、武家の敷物で、庶民は茅（かや）や藁でできた藁で暮らしていた。江戸時代に入り交換経済が発達するにつれ、良質の七島蘭の敷物が商品として大阪から江戸に広まっていったと考えられる。昔は「青藁」（せいえん）と呼ばれ庶民の敷物の一種と

考えられていた。その後、畳表としての利用が進み、豊後表、青表、原産地由来で「琉球表」などと呼ばれるようになった。今でも名称の統一は出来てはいないが、振興会では今後「くにさき七島蘭表」と統一するようにしている。

(2) 七島蘭の栽培が豊後（大分県）に伝わったのは江戸初期とみられ、言い伝えでは一人の若き商人の大きな野望から始まったと言われている。七島蘭がトカラ列島から大分に伝わった経緯については諸説あり、下記に記すが、ほぼ同時期に伝わっているところを見れば若き商人の橋本五郎右衛門の数株の苗から始まったのではとも考えられる。

## ① 橋本五郎右衛門の由来（大分市の青島神社）

1663年府内の商人橋本八郎右衛門の弟で当時28歳という若者であった。彼が商用で薩摩に出向いた時に琉球から渡来した「草藁」を見て驚いた。その当時府内で売られていた「カヤ藁」に比べ色、艶、手触りも良く、何とも言えぬ良い香りがした。彼はこの草藁に取りつかれ、当時王国であった琉球へ単身密航し命がけで苗を持ち帰った。

## ② 日出藩の木下俊長公（横津神社）

1601年、山香郷の鶴成金山で働いていた工夫が青藁を敷いているの、時の金山奉行が見てこれを移植したら藩の財政も潤うと進言したが受け入れられず、1661年、2代目俊治（としはる）に進言し受け入れられたが、そののち急死し3代目俊長が生産を奨励した。

## ③ 杵築藩（杵築神社）

松平英親（ひでちか）公の時、森永五郎衛門という庄屋がいたが、彼は元大友家に仕えた弓の達人で日出領主木下俊長公が病になり平癒祈願の末回復し、成就のお礼に千本の通し矢を奉納することとなった。その時、招かれた五郎衛門に褒美として、太刀と七島蘭苗を与えた。この苗が見事に

トカラ列島の位置



繁殖し、それを青蕈にして英親公に献上したところこれを産業にすることに着目し、栽培を奨励した。

七島いといぐさの違い

項目	七島い	いぐさ
植物学的分類	カヤツリグサ科	イグサ科
原産地	東南アジア	インド
気候区分	熱帯・亜熱帯性	温帯性
茎の断面	三角形	円形
生態	高温短日性	高温長日性
植え付け時期	5～6月	11～12月
収穫時期	8～9月	6～7月
作業の特徴	茎の分割	茎の泥染め
生産県	大分県のみ	熊本県・福岡県 ほか

「七島い栽培・加工の手引き」より

### 3. その後の七島蘭の生産

府内では五郎衛門の兄八郎衛門が大阪の間屋と取引があったため、この七島い表を送って販売動向を確かめると同時に、同業仲間と一緒に増殖に努めた。

杵築でも商人が中心となって増殖に努めているところから、農家は特定の商人と結びつき契約栽培方式の生産が進み、生産者から問屋にという取引形態が七島蘭の取引の始まりと言える。

その後、生産が増えてくる1700年代には、生産者も契約から自由販売なり仲買人が仲介し問屋に卸すという形態になった。

その後、藩の財政改善の意図から業者を許可制にし、取引税を徴収し藩の財政に充てた。それに

もかわらず、取引事情が乱れたため1804年府内藩は蕈会所を設立し、明治まで藩の専売制とした。

この様に、各藩にとっては外貨を稼ぐことが出来る唯一とっていいほどの特産品だった。杵築藩は3万石程度の小藩だったが、七島いの取り扱いでた収益を入れると10万石ほどの財力があつたと言われている。

その後、明治、大正、昭和も七島蘭は大分の特産として全国に行きわたっていた。昭和10年には1,600ha、戦後の昭和31年は1,500ha、500万枚程度生産していた。(現在のイ草産地熊本の八代市でも年間200万枚程度)

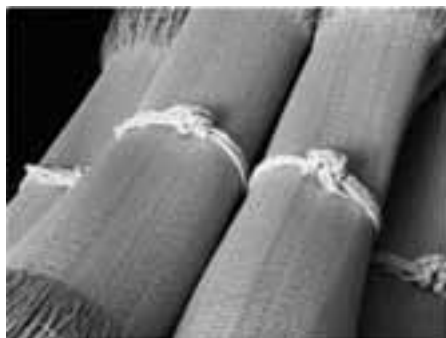
その後、生活様式の変化や農業を取り巻く環境の変化などで衰退していった。

### 4. 産地消滅の危機から奇跡の復活

平成22年にはピーク時1,500ha から95アールと激減、生産者も国東市内だけで6戸とUターンで後継者となった人を除き全員70歳以上となり産地消滅は目前と思われていた。当時たたみ業界では国産七島蘭は消滅したとさえ言われるようになった。

そのような中、七島蘭関係者、大分県、国東市、個人などで「くにさき七島蘭振興会」が発足した。もはや手遅れという声の中で高齢者の生産者の支援などを行い産地消滅を先延ばしすると共に、ともすれば変わり者と思われていた生産者のモチベーションを上げるべくメディア戦略を展開していった。

それまでの新聞やテレビでは産地消滅を憂うだけの論調だったのを、振興会の旗振りの元、七島蘭工芸の活躍や、祭事での参加、教育の場での工



七島いで織った畳表



七島いの断面



七島いの苗

( 12 ) 世界農業遺産「クスギ林とため池がつなぐ関東半島・宇佐の農林水産循環」での重要特用作物シチトウイ

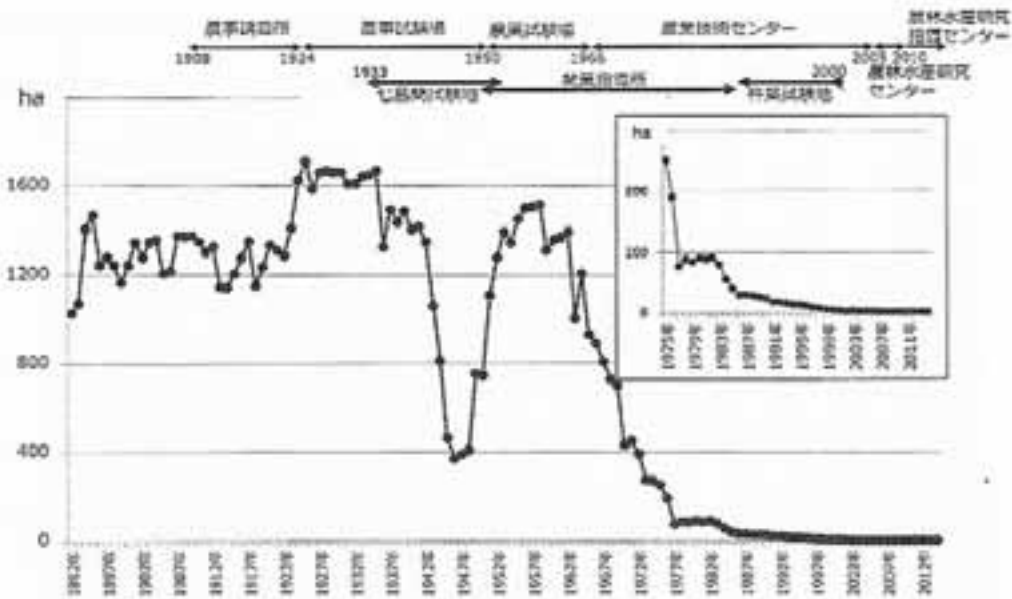


図9 大分県でのシチトウイ栽培面積と研究指導機関の変遷

1892年～1979年（阿南正・前田哲夫・本多公司（1980）<sup>11)</sup>、1975年～1994年（農林水産省（1995）<sup>9)</sup>、1994年～2005年（大分県農林水産部（2007）<sup>16)</sup>）および2006年～2014年 大分県東部振興局調べ（未発表）をまとめてグラフ化した。1975年から2014年までは縦軸の拡大図を囲みに入れた。上部には、大分県の農業関連研究機関の変遷<sup>20)</sup>を、2列目1933年より2000年まではその中でもシチトウイ関連研究機関<sup>11, 15, 20)</sup>の変遷を示した。

芸体験などをメディアに取り上げてもらいプラスイメージへと変えていった。そのことにより、30代の若い夫婦が七島蘭栽培に新規参入することで状況が一変し既存の高齢の生産者たちも周りの支援を受けながら積極的に栽培に取り組むようになってきた。

5. 世界農業遺産の認証により全国から全世界へ

(1) 2013年5月国際連合食料農業機関（FAO）により国東半島宇佐地域世界農業遺産に認定された。

世界農業遺産とは「近代工業化が進む中で、失われつつある伝統的な農法や農業技術をはじめ、生物多様性が守られた土地利用や美しい景観、農業と結びついた文化や芸能などが組み合わせり、ひとつの複合的な農業システムを構成している地域をさします。そうした地域のシステムを一体的に維持し次世代に継承していくことが目的です」と竹内和彦（国連大学上級副学長）氏が著書で述べている。



くにさき七島蘭振興会発足

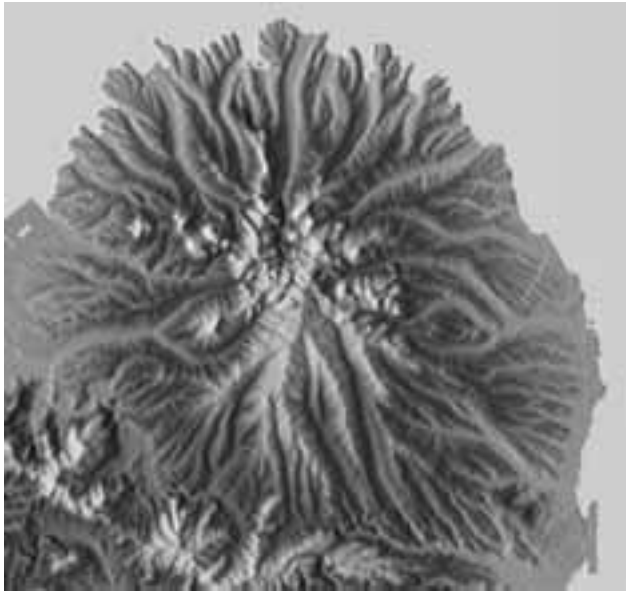


UターンIターンが現る



地域ブランド創設





国東半島地形図

国東半島は中央部の両子山系の峰峰から放射状に伸びた尾根と深い谷からなり、利水が困難な地域であり農業には不向きな地形である。そのため1200あまりのため池をつくり、そこには峰峰の頂上部にシイタケ栽培のためのクヌギ林の保水された水が流れ込むようになっている。限られて水でしいたけ栽培、換金性の高い七島藺栽培、米作りなど行い先人の知恵と努力で農業に不向きな地域を自然の力を借りて変えていった。中でも生活の基盤となったのが七島藺栽培であり、この地のシ

ンボリックな存在となっている。現在では、国内だけでなく海外からも視察が相次ぎメディアへの注目度も高まっている。

#### (2) 仏の里で心豊かな暮らしを目指す

辺境の地と言われた国東半島だが空家バンクのお陰かIターンやUターンがふえ移住者と地域の人たちの融合で新たな流れが現れている。七島藺栽培も豊表だけでなく工芸品やアクセサリーなど多様な商品を生み出し、また、製作体験型の観光や視察も始まり収益の向上も図られてきている。一時的な観光ではなく第二の故郷として長期滞在型の移住や、自然回帰の流れの中で七島藺栽培を含めた移住など多様な暮らし方が模索されてきている。振興会の会員の中には移住してきたデザイナーやアドバイザー、地元の七島藺問屋、畳店から企業家などが、新規の就農者や工芸士、そのほかこの事業に関係する人たちのアドバイスや、バックアップ、ネットワークを使ったPRなど積極的にサポートしている。最終的には、七島藺産業全体のビジネスモデルの構築、生産体制の改善など多面的に支援できる体制を目指している。日本の物作りの原点であった家内性手工業によって作られる七島藺製品を世界に通用する商品に磨き上げることで国東ならではの豊かな生活の実現を図る。